

追手門学院高等学校表現コミュニケーションコースの実践と成果からみるダンス教育の可能性

福岡小百合（追手門学院中等高等学校）

1. 研究目的

本校では、2014年に表現活動を通じて、主体的に生きる力を育成する「表現コミュニケーションコース」を設立した。教科として「ダンス」と「演劇」の授業を設け、身体を起点に実感のある学びを構築する独自のカリキュラムをもつ。本研究は、本コースの実践の成果を明らかにすることでダンス教育の可能性を検討することを目的とする。

2. 方法

(1) 対象者：2020年度に実施した「舞踊Ⅰ～Ⅲ」の授業を受講した1年生26名、2年生28名、3年生28名。

(2) 授業の内容：1回の授業は110分で行われ心身を解放するW-up、基礎ワーク、メインワークの流れで展開した。各学年の内容を表1に示した。

表1. 教育目標と各学年の内容

学年	回数	テーマ	目標	内容
1年	71回	自分を 知る	表現に必要な ところからの 育成	【舞踊Ⅰ】自分の身体に目を向け、表現の資本となる身体の機能や構造を体験的に学ぶ。ところからからだを解放し、型のあるリズムダンスを通してからだを使い切って踊ること、自分の思いを込めて踊ることを経験する。表現することを通じて身体にはところからからだがあり、それらが互いに影響し合っていることを学ぶ。
2年	75回	他者を 知る	創造に必要な ところからの 育成	【舞踊Ⅱ】コンタクトを通して他者と身体を共有し、自分の文脈にない新しい動きを体験することで、動きの幅を広げる。即興表現や作品を創る経験から自分の価値観で判断する力、0から1を生み出す創造力を養う。ダンス公演を通して、「ところ」と「からだ」を繋いで踊る経験を積む。
3年	35回	社会を 知る	社会と繋がる ところからの 育成	【舞踊Ⅲ（専門ダンス）】プロのアーティストと共同制作を行い「からだ」の可能性を追求する。自分の呼吸や五感に目を向けて、身体と動きの関係性を学び、よりよく生きるための方法を考える。今の「ところ」と「からだ」で感じる自分になりたい自分をテーマにソロを創作する。

※「ところ」は心理的側面、「からだ」は物質的側面、身体はそれらを全て含むものとして表記する。

(3) 調査期間：2020年4月～2021年3月

(4) 質問項目：教育目標に合わせて作成した60の質問項目に対して「1. 全くできない～5. とてもよくできる」の5件法で回答を求めた。

(5) 手続き：授業の初回と最終回でGoogle Formsを用いた質問紙調査を実施した。

3. 結果と考察

学年ごとの変化を明らかにするために、授業の初回と最終回の平均値と標準偏差を求め、対応のあるt検定を行った。その結果、1年次は10項目、2年次は5項目、3年次は17項目に5%水準

で有意な差がみられた（表2）。

表2. 授業初回と最終回で変化した項目

質問項目	1年	2年	3年
48 今何が必要なのかを考え、行動を起こすことができる。	-	+	+
5 「からだ」を動かすことで「ところ」が変化していると感じる。	+		+
33 他者に興味をもつことができる。	-		+
2 今の「からだ」の状態を感じることができる。	-		
3 自分が今、何を感じているのか言葉にすることができる。	-		
11 自分の行動をコントロールすることができる。	-		
14 自分にしかない強みを他者に伝えることができる。	-		
26 自分の身体を客観的な視点で捉えることができる。	-		
41 他者の意見を受け入れることができる。	-		
50 他者に相談することができる。	-		
6 「ところ」の変化によって「からだ」が変化していると感じる。		+	
19 体内のエネルギーの流れを感じることができる。		+	
21 空間（空気）を感じることができる。		+	
49 自分の役割を全うすることができる。		+	
4 感じたこと考えたことを、身体で表現することができる。			+
18 体温の変化を感じることができる。			+
20 重力を感じることができる。			+
22 身を置く環境によって身体の変化を感じる。			+
24 複数の（部位）感覚に意識をおきながら、同時に動かすことができる。			+
25 自分の「からだ」の輪郭（手の位置や高さなど）をクリアに感じることができる。			+
27 無意識に反応する身体の変化を感じることができる。			+
28 「からだ」の可能性を追求することを楽しむことができる。			+
32 相手の動きに応じて、自分の動きを変えることができる。			+
34 他者の身体から、目には見えない文脈や背景を想像することができる。			+
39 私ずかしがらず、自分を表現することができる。			+
53 偶然を面白がることできる。			+
57 授業を通して、身体が整った。			+
59 表現の授業を通じて、普段の授業を受ける姿勢がより前向きになった。			+

+…5%水準で有意に高くなった項目 -…5%水準で有意に低くなった項目

1年次は5. 「からだ」を動かすことによって「ところ」が変化していると実感する一方で、身体の構造を学び、身体に意識的になったことから“できていない”と感じることが増えている。2年次は「からだ」の内に目を向けて即興的に踊ることや他者と「からだ」で対話する経験から、「からだ」の内や外を捉える感覚が鋭敏になったと考える。3年次は「からだ」の可能性を追求する中で、偶発的に生まれる動きを面白がり多面的な身体を感じたことで、身体から相手を想像したり、身体で自分を表現できるようになったと考察する。また、3学年とも共通して有意な差があった48. 今何をすべきなのか考え、行動できるようになったの項目は1年次で有意に低く、2、3年次は有意に高くなった。そこで、他の項目との相関係数を求めた結果、2年次は身体に関する8項目との間に、3年次は17. 皮膚を感じることができる、25. 自分の身体の輪郭をクリアに感じることができるの2項目との間に1%水準で有意な相関がみられた。この結果より、身体を内観する力や身体の外を感じる「からだ」の感度を高めることが主体的に行動する力と関係があることが明らかになった。